



## 東北地域の水田輪作への期待

所長  
羽鹿 牧太 (はじか まきた)

令和3年4月1日付で東北農業研究センター所長を拝命しました羽鹿です。よろしくお願いいたします。

さて農研機構では令和3年4月からいよいよ第5期中長期計画が始まりました。東北農業研究センターでは、①直播圃場管理による高収益水田輪作システム、②野菜シームレス周年生産技術による高収益水田複合経営、③原発被災地での営農再開、④緩傾斜圃場の合筆とデジタル土壌管理による畑作物生産力増大、の4つを研究の柱として研究開発を進めていくことにしています。

このうち今回は東北農業の柱ともいえる水田輪作について触れたいと思います。近年東北の水田作地帯の農業経営は急速に大規模化し、50ha以上の大規模経営も珍しくなくなってきています。これに伴って従来の生産技術で対応できない状況となっており、省力化技術の開発が急務となっています。こうした状況に対応して東北研では水稲のNARO式乾田直播、NARO式湛水直播を開発し、第5期ではこれら技術の普及を強力に進める予定です。

一方、国内の米の消費量は年々減少し、毎年のように過剰生産の影に悩まされています。このため、大規模経営体においても水稲以外の作物生産の重要性がこれまでに高まっています。今中長期計画において東北研は、野菜ではタマネギ、畑作物では子実用トウモロコシと大豆を中心に水田輪作に取り組んでいくことにしています。タマネギの主産地は北海道、九州、兵庫県などですが、北海道産と西日本産の出荷の谷間の品薄時期は輸入品で賄われています。そこに東北産のタマネギを入れ込むことができれば、輸入品のシェアを奪う形で産地形成ができるのではないかと期待しています。子実用トウモロコシは耕畜連携が鍵で、適切な栽培体系ができて安定的に飼料供給ができれば商機はあるとみています。

もう一つの畑作物の大豆ですが、私の専門でもあるので少し詳しく述べたいと思います。大豆は畑作物の中で

は比較的湿害に強く、また200kg/10a以上収穫できれば実収入は水稲並みになるので、水稲との輪作にはちょうど良い作目です。しかし実際には東北地域の大豆単収は低く、平年単収は140kg/10aを少し超える程度にとどまっています。東北地域は台風害や梅雨の長雨などの影響が西日本に比べて少なく、栽培には有利な地域だと思われていますが、なぜこの程度の単収にとどまっているのかははっきりしないようです。大豆300A技術等の要素技術はきちんとあるので、これらを経営体の規模や栽培環境ごとの実情に合わせて組み合わせ、改良すれば単収の大幅アップはそれほど難しくはないと思います。東北地域は面積だけで言えば北海道と並ぶ国内随一の生産地域ですので、単収が北海道並みになれば大豆の自給率を3%くらい上げる効果があります。今期の中で水稲直播体系を裏から支える大豆の安定多収技術が開発されることを期待しています。

東北地域は南北に広く、また多様な自然条件を備えた地域だと思います。でも水稲へのこだわりが強かったためか、水稲以外の野菜作、畑作等については、生産基盤、加工・流通、ブランド化などの販売戦略、いずれもが貧弱に思えます。水稲を大切にしつつ、もう少し農業の幅を広げるべき時代に入っているのではないかと、自分がその一助になれば良いかと願っています。